

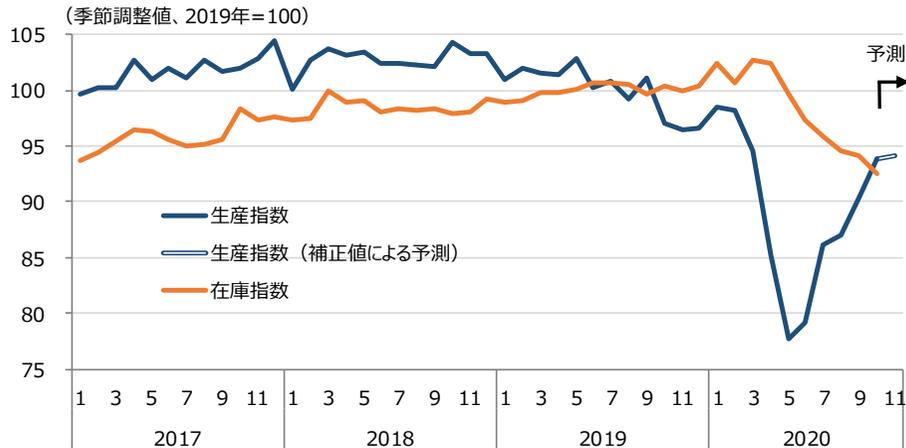
日本

鉱工業生産指数（2020年10月）

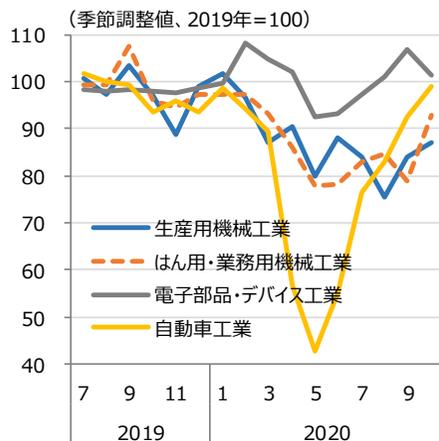
持ち直し傾向は継続も、先行きは改善ペースが鈍化する見込み

政策・経済センター
田中康就
03-6858-2717

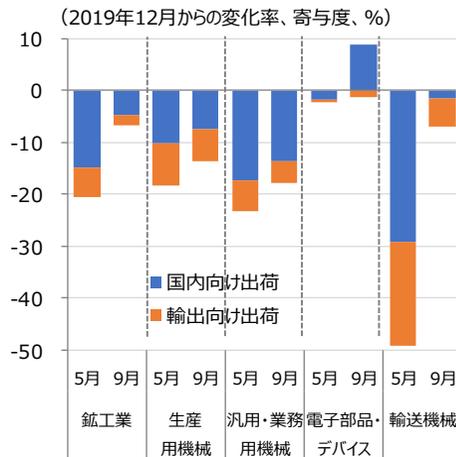
1 鉱工業指数（生産）



2 業種別の生産指数



3 業種別の出荷指数



注：公表されている直近の値は2020年9月。
出所：経済産業省「鉱工業出荷内訳表」

評価ポイント

今回の結果

- 20年10月の鉱工業生産指数（速報）は、季調済前月比+3.8%と、5ヶ月連続で上昇（図表1）。19年平均対比▲6%程度にまで持ち直した。
- 業種別にみると、15業種のうち12業種が増加した。
- 自動車工業（季調済前月比+6.8%）は、5カ月連続で上昇し、生産全体を+1.1%ポイント押し上げた（図表2）。20年前半に落ち込んだ反動もあって国内外ともに需要が持ち直しており、19年平均並みの水準まで回復した。
- 生産用機械工業（同+3.4%）は、2カ月連続で上昇。はん用・業務用機械工業（同+17.9%）は、高めの伸びとなった。もっとも、企業の設備投資姿勢が慎重化していることから、コロナ前に比べて落ち込んだ状態が続いており、ともに持ち直しの動きは鈍い。
- 電子部品・デバイス工業（同▲5.2%）は、5カ月ぶりに低下したものの、依然として19年平均を上回る水準にある。中国向け輸出の底堅さに加え、5Gや自動車の電動化、リモートワーク対応などに関連する国内での投資が押し上げ要因となっているとみられる。
- 製造工業生産予測調査によると、11月の生産は、企業の予測値と実績値の平均的なズレを経済産業省が補正した値が季調済前月比+0.4%程度となっている。

基調判断と今後の流れ

- 生産指数は、国内外での経済活動再開を背景に輸出や国内需要が持ち直していることから（図表3）、5月を底に上昇基調が続いている。
- 先行きの生産は、電子部品・デバイス関連の需要の強さは押し上げ要因になるとみられるものの、①新型コロナの感染が国内外で再拡大していること、②企業の投資姿勢の慎重化が生産用機械や汎用・業務用機械など投資財生産の抑制要因となること、③雇用・所得環境が悪化していることによる家計の購買力低下を背景として消費財生産の回復に時間がかかると予想されることから、持ち直しペースは鈍化する可能性が高い。
- 生産の下振れリスク要因は、①新型コロナの感染拡大ペースの一段の強まりによる世界経済の再縮小、②国内での流行拡大による外出・営業自粛要請の一段の強化が挙げられる。下振れリスクが顕在化した場合には、生産が再び減少に転じることも考えられる。